

**令和6年度
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業**
中間支援振り返りシート（2025.3）

活動団体の活動におけるテーマ

『生産者と消費者が互いに支え合える風土づくり』

活動団体の活動地域　：徳島県

活動団体名：一般社団法人とくしまCSA風土

中間支援主体名：認定NPO法人

とくしまコウノトリ基金

活動団体の紹介

- ・ ミッション：環境と調和の取れた食糧システムの確立と、人々の健康、豊かな食文化を未来に繋げるため、生産者と消費者をつなぐ**CSA**（Community Supported Agriculture）を主として徳島県内全域に広げ、全国さらには世界にネットワークを広げる。
- ・ 活動エリア：徳島県
- ・ 取組内容：勉強会の開催、マルシェの開催、農業体験、**CSA**立ち上げの支援、地産地消の促進、交流会の開催、小学校への出前授業や企業等での講演

生産者と消費者を直接つなげる

※CSAを普及させるのではなくCSA風土を広げていくのがゴール



活動計画（概要）

地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

- ・人の交流が生まれ、環境や生物多様性を意識した農業や農作物に対する理解も深まり、地域経済が回りだしている。
- ・生産者と消費者双方の顔が見える関係となり、作る側と食べる側が互いに励まし支え合う元気な地域になっている。

地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

環境にやさしい農業や農業体験の受け入れができる農家、消費者に対する食農教育実施者、地産地消や社員への福利厚生等に関心のある企業、農業や食育に関する行政といった、地域の農家とそれを支える行政、消費者をつなぐ団体でPFを構築し、現在の課題の整理と、農家と消費者をつなぐシステムづくりを検討しながら、実現に向けてチャレンジする。

ローカルSDGs事業として取り組む内容

- ①食と農と環境について消費者への行動変容を促す事業
1年を通じて、消費者や生産者、食育関係者、行政を巻き込んだフィールドワークや勉強会を行う。
- ②食と農と環境をテーマとした企業への課題解決事業
企業の従業員が親子で農業体験を行うことができるプログラムを作る。

地域の現状

徳島県の食料自給率はカロリーベースで40%、生産額ベースで110%だが、その多くは近畿・関東圏に供給しており、地産地消率は比較的低く、手に入れにくい。鳴門市にはれんこん、鳴門金時、なし、らっきよの徳島を代表するブランドの農産物があるが、大規模産地（他地域や海外）の低価格のモノに負けてしまい、生産者の意欲も下がっている

2026年度末の状態目標

訪問した企業の中で、食と農に関する企業案件の事業を実施している。
マルシェを毎月開催し、農家とファンになった消費者で交流が盛んに行われている。
農業体験を定期的に開催し、CSAに参画したいと思う消費者が現れている。
勉強会を3ヶ月に1回開催し、組織として必要な方針をブラッシュアップしている。
生産者部会に加え、食品加工部会、流通小売部会を定期的に開催している。
とくしま版フードシステム（CSA等）を特定の関係者で試験運用をしている。

2025年度末の状態目標

新たに5社の企業を訪問している。
新たに20軒の農家を訪問している。
マルシェを毎月開催し、農家とファンになった消費者で交流が行われている。
食育推進全国大会に出て、これまでの活動について発表している。
農業体験の企画を行い、定期的に開催することでCSAに関心を持つ消費者が現れている。
勉強会を3ヶ月に1回開催（組織として固まった方針に向けて年間計画で動いている）。
企画部会を定期的に開催し、とくしま版フードシステムについて議論できる体制を作っている。
生産者部会を定期的に開催し、CSA等の議論が活発に行われている。

2024年度末の状態目標

5社の企業を訪問している。→13社訪問した。
20軒の農家を訪問している。→45軒訪問した。
マルシェを毎月開催し、農家とファンになった消費者で交流がはじまっている。→マルシェを毎月開催(12回)し11月に交流会を開催した。
一緒に取り組める仲間（食育関係者）が2人見つかった。→食育や環境問題、地域づくりに興味がある2人が見つかった。
食育推進全国大会に向けて行政と連携している。→徳島県みどり戦略推進課より講演の依頼をいただいている。
農業体験の企画を行い、プランが確立できている。→農業体験のプランが確立でき、農業体験(+畑ツアー)を計10回実施した。
CSAを3軒の生産者が始動している。
勉強会を2ヶ月に1回開催（組織として必要な方針が固まっている）→勉強会(+交流会)を計5回開催した。2025年は3ヶ月に1回の開催予定である。

■見立て

野菜の生産量が多いものの、地産地消率は低く、消費者の地域農業に対する意識は低い。有機栽培や地域活性化の想いを持つ農家が増加しているものの、支える体制が弱い。活動団体は管理栄養士や農家とのネットワークを構築し、企業から地産地消等の支援依頼を受けていることが強みである。しかし、さらに取組を進め強固な体制づくりのためには、代表と同じように主力として動く中心メンバーを増やす必要がある。

■打ち手

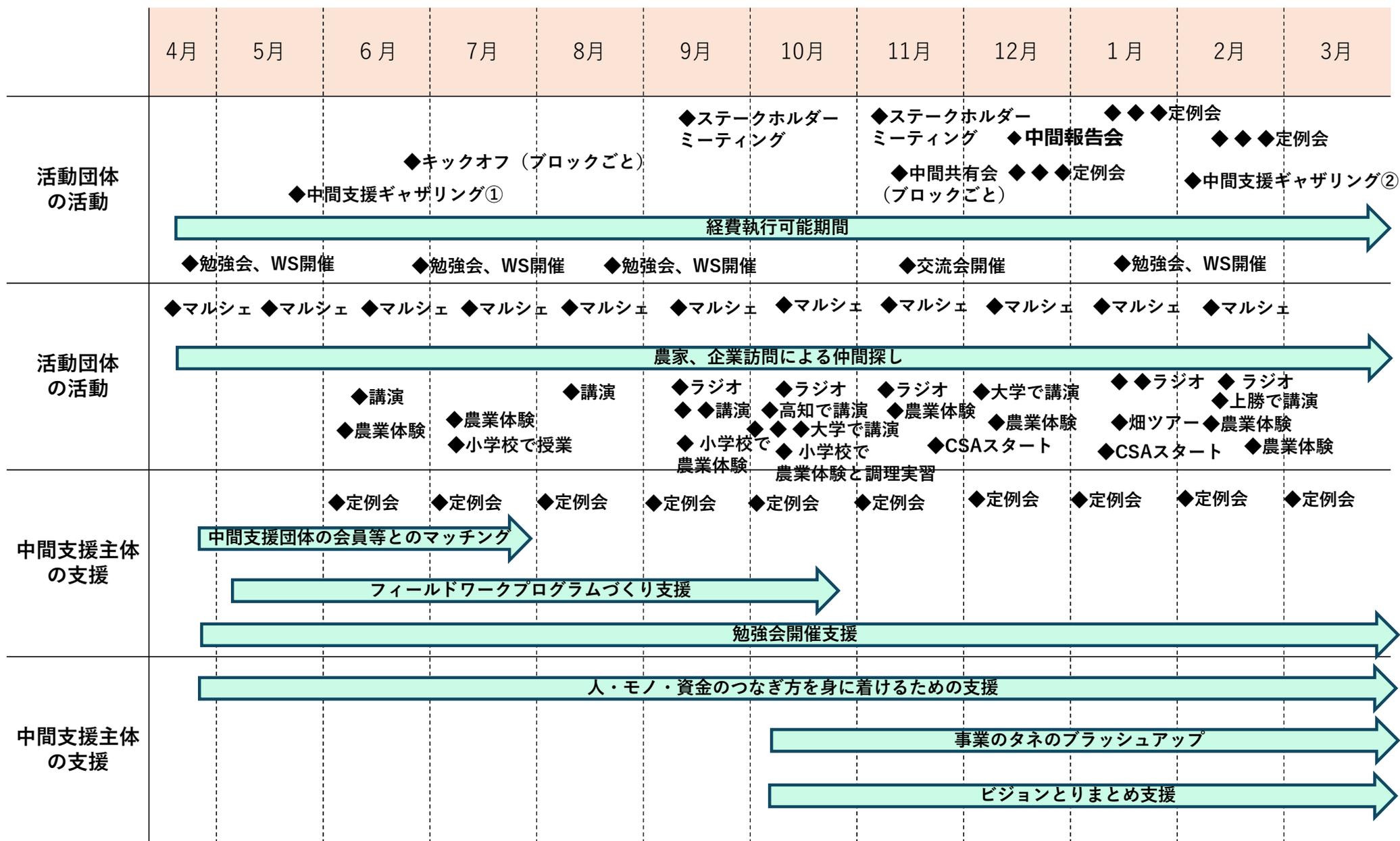
中間支援団体の経験を踏まえて、取組に賛同してくれる仲間の巻き込み方や集め方、事業のタネの見つけ方や育て方といった、思いを事業に練り上げていく手法を、伴奏支援しながらアドバイスする。中間支援団体のリソースを活用しながら、ステークホルダー候補者とのマッチングや、活動団体が計画している農家と消費者をつなぐフィールドワーク実践に向けたプログラムづくりの支援を行う。

■中間支援機能の強化・振り返り

今回の事業で他団体の取組を初めて本格的に支援する経験を活かして、徳島県内の団体で取組を加速させたいがうまく動かせていない団体の支援につなげていきたい。結果、当団体が進める事業の拡大にもつなげていきたい。

活動・支援のプロセスの振り返り

■R6年度活動・支援内容



活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル①

地域のビジョンを描く

中間支援主体の支援

● 上記アクションサイクルの取組を活動団体が進めるにあたっての見立て

マンダラや事業のタネの内容が、活動団体の取組が中心になっており、地域やSHの感じている課題までは盛り込めていない。

● 具体的な支援内容（打ち手）

マンダラや事業のタネの作成補助や、地域循環共生圏の考え方について説明した。

● 打ち手による活動団体の変化（意識・行動・活動の進捗）

徐々にマンダラとタネについての理解が深まってきた。とくに中間共有会で他団体の取組を学んだことで、SHのやりたいことを加味して作成する重要性を感じていた。

● 中間支援主体としての気づき・成長

他団体と交流することで、マンダラやタネのイメージが沸いたり、学びになっていた。

活動団体の取組

● 活動名・時期

- 企画部隊の立ち上げ・9月
- コアメンバー候補者とのマンダラ作成・1月

● なぜそれを実施したのか（実施目的）

- 勉強会の企画内容に、SHのやりたいことも取り入れるため。
- マンダラに多様な視点を取り入れるため。

● 実施したことによって共生圏づくりにどのような変化が起きたか（活動団体自身の変化・周囲の変化等の共生圏づくりに関わる進捗）

企画部隊やコアメンバー候補者と共に取り組むことで、さまざまな考えを取り入れた計画づくりができるようになってきた。

活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル①

仲間を探す

中間支援主体の支援

● 上記アクションサイクルの取組を活動団体が進めるにあたっての見立て

団体が設立したばかりであり、取組を展開するための仲間が集まっていない。

● 具体的な支援内容（打ち手）

中間支援団体の会員等とのマッチングや、巻き込み方についてアドバイスした。

● 打ち手による活動団体の変化（意識・行動・活動の進捗）

どんな考えを持って何をしたいと思っているかを知ってから、取組の中心へと巻き込むようになった。

● 中間支援主体としての気づき・成長

関わる人たちと意見交換をしたり、勉強会をするなかで、仲間が増えたり、活動団体の視野が広がったように感じる。

活動団体の取組

● 活動名・時期

中間支援団体がステークホルダーと実施した環境学習や収穫体験に、スタッフとして参加・5～10月

● なぜそれを実施したのか（実施目的）

- 中間支援団体がどのように仲間を広げ、事業を作り上げているかを学ぶため。
- 農業体験等の企画を検討しているが、開催した経験がないため。

● 実施したことによって共生圏づくりにどのような変化が起きたか（活動団体自身の変化・周囲の変化等の共生圏づくりに関わる進捗）

環境保全型農業を学ぶプログラムで、農業体験や食育だけでなく、環境保全、気候変動対策、地域の仕事といった、広い内容の学びを提供できるという気づきがあった。

活動・支援のプロセスの振り返り

- (特に前2スライドの支援を実施するにあたり、) 今年度、力を入れて取り組んだ中間支援は？ (中間支援機能チェックリスト.xlsxより上位3つを選んで記入)

協働ガバナンスの項目	中間支援機能	項目(番号)	支援をしたタイミング等
運営制度の設計	プロセス支援	(5) ①	定例会および必要と感じた際
チェンジ・エージェント機能	変革促進機能	(1) ⑨	定例会および勉強会の企画部会
チェンジ・エージェント機能	問題解決提示機能	(2) ④	12月

● 共生圏づくりを進めるために、活動団体の能力をどう引き出せたか

思いはあるものの、それをうまく表現したり相手に伝えられていなかったため、言葉の整理や説明資料作成支援をすることで、相手に伝わりやすい資料ができた。事業だけでなく協働での取組を進めることも初めてだったため、事業の立て方や協働で取り組む際のポイントをアドバイスし、徐々に身につけてきたように感じる。

● 中間支援主体として向上したと思う中間支援機能

中間支援の経験はあったものの、すでに事業を展開している団体が対象だったため、今回のようなスタートアップ段階の支援は初めてだった。考え方や進め方といった、これまでよりもより丁寧なアドバイスや支援の重要性を理解でき、どのタイミングでどのような内容を伝えたらいいかという経験を積むことができた。

● R6課題だと感じたこと

コアメンバーがおらず、活動団体の代表中心の動きとなっていたためコアメンバー候補を見つけるようアドバイスし続けた。候補者2名が見つかり、一緒に資料作成作業を始めたが、継続して関わってもらえるように状況を注視しつつ、適宜アドバイスしていきたい。

地域循環共生圏づくりに向けた次のアクション

- **地域循環共生圏づくりのために、どのような中間支援機能を発揮できるといいと考えているか。R7～中間支援主体として今後どのようになりたいか。**

これまで支援したり連携した団体は、すでに事業を展開し、ステークホルダーの広がりもある団体ばかりであったため、今回のようなスタートアップ段階の団体への支援ノウハウを身に着け、新たなプレーヤーの発掘や事業支援ができるようスキルアップをしていきたい。

- **活動団体がアクションサイクルを回せるようにするための次年度の見立て・打ち手（具体的な支援策）**

コアメンバー候補2名が継続して関わってもらえるよう、中間支援団体からもサポートしながら、関わり方の強化をしていきたい。

事業のタネが動き始めているので、ステークホルダーとの連携や新たな関係者の発掘支援をしながら、取組が持続的なものとなるようアドバイスしていきたい。

- **地方・全国事務局にサポートしてもらえると嬉しいこと**

中間支援団体と活動団体だけでは、だんだんと主観的視点が増えてきてしまうため、外の目から見た所感をいただけると、客観的視点に立ち返ることができる。